

国立国語研究所学術情報リポジトリ

八丈方言における新たな変化と揺れをめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金田, 章宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002405

八丈方言における新たな変化と揺れをめぐって

金田 章宏

はじめに

2012年9月6日～9日の4日間にわたり、国立国語研究所「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」プロジェクト(プロジェクトリーダー;木部暢子)による八丈方言調査が東京都八丈町でおこなわれた。この調査は、2010年の奄美喜界島方言調査、2011年の宮古方言調査につづくもので、八丈方言調査につづいて2012年の12月はじめには奄美の与論島方言と沖永良部島方言の調査が実施された。

今回の八丈方言調査では基礎語彙調査と文法調査がおこなわれたが、本発表ではそのうちの文法調査¹の結果から、この方言における新たな変化やさまざまな揺れを中心にとりあげる。

なお、以下の説明のなかの方言表記は例文の一部もふくめて簡易音声表記とするが、例文自体の表記は調査票のままとする。(調査者の提出した調査票を第三者が入力したものをそのまま使用した。したがって、調査者の記入ミス、および入力者の入力ミスが存在する可能性はある。)例文の頭の数字は調査票の例文番号、末尾は地区名と調査者2～4名の頭文字である。また、地区名のあとに該当箇所の伝統方言形をイタリック体(斜体)でしめした。

本稿では、「標準語」を話しことばに対する規範的な書きことばと位置づけ、話しことばのなかでより規範的なものとして「共通語」を使用する。単に共通語といえば標準語に近似した日本共通語であり、そこまでの規範性はないにしても、たとえば沖縄県内でおおよそ理解可能な沖縄共通語(首里・那覇方言)があり、その下層には、さらに規範性は希薄になるが八重山地方の八重山共通語(石垣四箇字方言)がある、というような階層性もみられる。たとえば八重山の西表島祖納^{いりおもて そない}の話者は、とくにメディアの影響もあって沖縄共通語をおおよそ理解し、また八重山共通語の知識もある程度あるが、沖縄本島や石垣島の人びとのほとんどは、祖納の方言を理解できない。八丈方言にそこまでの階層性はみられないが、後述する坂下地区のほうがおそらく、坂上地区よりも互いに対する影響力は大きいだろう。

1. リ形強変化動詞過去形のタリ形化

上代中央語の動詞アスペクト形式のうち、リ形(ノメリ)とタリ形(ノミタリ,ミタリ)については、強変化動詞ではその両方が、弱変化動詞ではタリ形のみが使用されたが、中古になるとリ形は消滅し、すべてタリ形になって現代語の過去形シタに連続していく。

一方、この方言ではタリ形への一本化が中央語に千年ほども遅れて、まさにいま起ころうとしている。すなわち、この方言では強変化動詞過去形がリ形(「行った。」*ikara* < **ikaro-wa* < **ikiaro-wa*)、弱変化動詞がタリ形(「見た。」*mitara* < **mitaro-wa* < **mitearo-wa*)であられるのが基本であったが、そこへ新たに強変化動詞のタリ形 *iqtara* があらわれるようになったというものである。こうした現象がいまになって起こっていること自体、この方言の文法的な古さをしめ

¹文法班の話者の数は、三根地区6人、大賀郷地区4人、檜立地区4人、中之郷地区4人、末吉地区3人の計21人。

すものであるが、さらに、強変化動詞がこれまで基本的にリ形のみだったことに注目するなら、強変化動詞にリ形とタリ形が混在する上代中央語よりも古い姿を保っていた可能性さえ指摘できる。

この新たな変化については、金田 2012²などでもとりあげたが、そこで例としてあげたのは^{かしたて}檳立地区の 1950 年代生まれの女性 1 名のものと^{おおかごう}大賀郷小学校の方言劇の台本からのものだけだった。八丈島は人口の集中する^{さかした}坂下地区(^{みつね}三根, ^{おおかごう}大賀郷)と、三原山の中腹に分散する^{さかうえ}坂上地区(^{かしたて}檳立, ^{なかのごう}中之郷, ^{すえよし}末吉)に大きくわかれるが、今回の調査により、末吉以外の全地区でこの語形の使用が確認された。傾向としては、坂下の三根と大賀郷、坂上では大賀郷寄りの檳立で多く観察された。

32 kono uwagiwa konome: okinawade nisen ende {katto:ʒa/ kattara:} (この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。) 三根 KO (*kao:ʒja/kawara*)

53 備考; 「なった」 nattouʒa (去年いところが中学の先生になった。) 三根 KO (*naro:ʒja*)

65 juwe:no tokinja bammamade odottara (お祝いのときにはばあさんまでおどった。) 三根 KO (*odorara*)

50 mo: kamo(:)monowa minna kande {fimattara / fimatta(jo:) / fimo:rara:} (もう食べられるものは全部食べた。) 大賀郷 YK (*sjimo:rara*。なお, *kamo:monowa* は「食べたものは」の意味。)

58 wagaeno dannawa(no:) takedeno: kagoó {tsukurara / tsukuttarodara(作っている) / tsukuttara / tsukuttarowa(作っている)} (夫は竹でかごをつくった。) 大賀郷 YK (*cukurara*)

69 ka:tʃan wa misege: kaimononi {ito:dʒa: / ittara: / ikara: / ittadʒa:} (かあさんは市場へ買物に行った。) 大賀郷 YK (*iko:ʒja/ikara/iko:ʒja*。 *ito:dʒa:* は *itto:dʒa:* か)

70 mitʃide (no:) gakkono sense:ni {attara: / awara: / ao:dʒa:} (道で学校の先生に会った。) 大賀郷 YK (*awara*)

31 nimotsuga omokente ϕ utaride {mottara / moto: dara} (荷物が重かったので、二人でもった。) 大賀郷 KT (*motara*)

82 sakkimade nonde aro:ga dokoge: ittefimatto:。(あの人、さっきまでここで「飲んでいただけ」どこに行ったかな、といった意味で、「ノンドログ(あるいは、ノマツトログ、ノマラツトログ)」といますか。) 大賀郷 KT (*iqte sjimo:ro:*)

53 kjonen itokoga teu:gakuno sense:ni nattara (去年いところが中学の先生になった。) 檳立 KP (*narara*)

58 utcino ϕ towa takede kago:{ tsukurara/ tsukuttara} (夫は竹でかごをつくった。) 檳立 KP (*cukurara*)

69 okkatcaŋwa miseni kaimononi {ikara/ ittara} (かあさんは市場へ買物に行った。) 檳立 KP (*ikara*)

70 mitcide gakkono sense:ni {awara/ attara} (道で学校の先生に会った。) 檳立 KP (*awara*)

70 mitʃide gakkono sense:ni {butasukwatte / butasukwattara} (道で学校の先生に会った。) 檳立 KT (*bucuko:rara*)

32 kono hebirawa kono mja: okinawade nisenennde {kattara/ kattekitara} (この上着はこのまえ沖縄で二千円で買った。) 中之郷 YT (*kawara*)

² 「八丈方言における新たな変化と上代語」『言語研究』142号 2012.9 pp.119-142

2. 動詞活用型動詞否定形の形容詞活用型化

共通語の動詞否定形は形容詞型の活用をするが、この方言では形容詞非過去形が上代東国方言の流れを受け継ぐ e 連体形(akake「赤い」、nake「ない」)をもとにした、「赤い。」akakja<*akake-wa, 「ない。」nakja~naqkja<*nake-wa であるのに対して、動詞の否定非過去形は、動詞とおなじ o 連体形をもとにした nomi(N)naka<*nomi-nako-wa のような活用をする。動詞の o 連体形も同様に上代東国方言の流れを受け継ぐものであるが、そこに共通語の影響を受けた形容詞型の新たな動詞否定形が発生している。

これには段階があり、~naka を形容詞的に拗音化して、jomiNnakja(読まない。)にするだけのものから、形容詞 nakja(ない。)よりも一般的な(おそらく新しい)促音のはいった語形 naqkja(ない。)にあわせて促音を挿入し nomiNnaqkja にしたり、動詞型の o 連体形ではなく、形容詞型の e 連体形で jomiNnakedara のようなノダ形をつくったり、jomanakja のように動詞語根の母音も共通語的な a にしたり、さらには語尾を共通語的に~nakaqta にするものまである。その一方で、否定ズがズになる以前の要素をふくむ可能性のある nomiNzjarara(大賀郷), jomiNzjarara(檜立)のように、とくに坂下で一般的な語形である jomiNnakarara よりもさらに古い語形も併用されている。

なお、nomi(N)naka の撥音 N はのちの挿入によるもので、坂上であらわれにくく、坂下であらわれやすい。

62 warewa kino: jimbun o {jominna(k)ja / jominnakedara / jominnakarara} jominnaka / jominnakodara (おれはきのうは新聞をよまなかった。) 大賀郷 YK (jomiNnaka/jomiNnakodara, jominna(k)ja は jominnak(j)a のあやまりか)

76 今でも使う。nomindzarara / nominnakkja (きのうはだれも「飲まなかったよ。」といった意味で、「ノミンジャララ」といいますか。) 大賀郷 YK (nomiNnaka, ただしこれは非過去形)

45 sake: areba anjimo irinnakkja (酒さえあればなにもいらぬ。) 大賀郷 KO (iriNnaka)

45 sake{ga/gase:} areba anjimo {irinnaka(いらぬ)/irinnakkja(強い表現)}.(酒さえあればなにもいらぬ。) 大賀郷 NS (iriNnaka)

62 wara: kini:wa jimbun {jominnakarara/ jominakatta} (おれはきのうは新聞をよまなかった。) 檜立 KT (jomiNnakarara)

62 warewa kino: eimbu {jomindzarara/ jominnakarara/ jomanakja} (おれはきのうは新聞をよまなかった。) 檜立 KP (jomiNnaka, ただしこれは非過去形)

49 {ara / wara} {satumanja:jowa / kammonja:jowa} {tabenakja / kaminakja}. (おれはさつまいもなんか食べないぞ。) 中之郷 SN (tabenaka/kaminaka)

77 kinnakatta / kinnakarare / minnakarara (「来なかった、見なかった」は、キンジャララ、ミンジャララですか。) 中之郷 KT (kiNnakarara. つぎの kinnakarare はコン強調形の結びのかたちであり、コン強調辞とともに使用される。)

3. 動詞の o 連体形関係

共通語などでは動詞の「連体形」と「終止形」が同音になっているが、この方言では「終止形」にふたつの意味がある。ひとつは「連体形」に終助辞がついて文末で使用される nomo-wa とい

う「終止形」で、この終助辞はこの語形にとって義務的である。もうひとつは、「旧終止形」ともいべきもので、単独では使用されずに推量形 *nomu-nou-wa* などにのみあらわれる *nomu* である。もともとは連体非過去形 *nomo* と終止非過去形 *nomu* の対立があったと思われるが、現代方言では *nomu* は特定の語形の内部にのみ存在する。

以下の連体非過去形の例では連体形のみが～*u* になり、第2～第4例の終止形のほうは～*o-wa* のままだが、つぎの終止非過去形の例では終止形が～*u-wa*, ～*u-zja* であらわれ、さいごの「ノダ」形でも～*o-dara*, ～*o-do:zja* となるところが～*u-dara*, ～*u-do:zja* になっている。

・連体非過去形

50 *mo: kameru monowa ze:nbu kamara:* (もう食べられるものは全部食べた。) 三根 YK (*kamero*)

64 *ameno furu çiniwa ba:tjanwa jede terebibakkari {mita:rowajo / mita:rowa:}*(雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。) 三根 YK (*huro*)

64 {*amega furu tokiwa / ameno çinja*} *ba:sanwa jede terebi bakkari mitarowa* (雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。) 大賀郷 KT (*huro*)

64 *ameno furuci wa ba:tjanwa ede terebibakkari {mitarowajo / mitearowa}*(雨のふる日にはばあさんは家でテレビばかり見ている。) 中之郷 KT (*huro hiwa*)

50 *hara taberareru monoçwa minna tabetara.* (もう食べられるものは全部食べた。) 中之郷 SN (*taberarero*)

・終止非過去形

34 *magowa manzu:jo ko:bedake kamuwa* (孫はまんじゅうを皮だけ食べる。) 大賀郷 KO (*kamowa*)

3 *o: joge:wa waga ikuwa*(うん、畑へはおれがいく。) 大賀郷 KO (*ikowa*)

16 *wa:, itoko-no çutoŋ-ga jane-no we-ni hositaru ça.* (いとこの布団がやねの上にはしてある。) 中之郷 KH (*hosjitearozja*)

18 *macciro d'wa tori-ga sor'wa tondjaru ça:* (真っ白な鳥が空を飛んでいる。) 中之郷 KH (*toNdearozja*)

23 *mago-ga kjonen-kara kuni-ni aru ça.* (孫が去年から東京にいる。) 中之郷 KH (*arozja*)

34 *mago wa man çu:jo ka:be dake kamuwa* (孫はまんじゅうを皮だけ食べる。) 末吉 KPYH (*kamowa*)

・「ノダ」形

47 *sono mizu:wa nomuna. nomuda:ba kono mizu: nome* (その水はのむな。のむならこの水をのめ。) 三根 KO (*nomoda:ba*)

68 *ifaga keto: kusuri o nomeba {naorudo:dza: / naoruno:wa}*(医者がくれたくすりをのめばなおるだろう。) 大賀郷 YK (*naorodo:zja*)

27 *o:saka kara to:kjo:madeno kifatjinwa {ikurado: / ikura surudo:}*(大阪から東京までの汽车租赁はいくらだろうか。) 大賀郷 KT (*sodo:~sjodo:*)

44 *saki:wa komekara tsukuru doa ça.* (酒は米からつくる。) 中之郷 KH (*cukurodoazja*)

4. 疑問詞+ka

共通語では疑問詞の有無と述語形式のあいだに呼応的な関係はないが、この方言では疑問詞のある WH 疑問文では述語が「連体形」になり(anjo nomo? なにを飲む?), 疑問詞のない YN 疑問文ではそれが「連体形」+終助辞 ka (sakei nomoka? 酒を飲む?)になる。新たな傾向として、疑問詞の有無にかかわらず、述語が「連体形」+終助辞 ka であらわれる。伝統方言形ではすべて ka は不要である。

48 ande ome:wa {kamin`no:/ kaminno:ka}. (なぜおまえはたべないのか。) 三根 NS

48 ande omaewa {tabenno:ka / kaminno:(ka)}? (なぜおまえはたべないのか。) 大賀郷 YK

48 adde {omiwa / omja:wa(目上の人)} {kaminnoaka: / aganno:ka / agan noaka:} agari? (なぜおまえはたべないのか。) 檜立 KT (筆者注: さいごの agari は意味不明)

48 ande omja:wa {kaminai / kaminakoka}. (なぜおまえはたべないのか。) 中之郷 KT

5. 疑問詞引用句

YN 疑問文の述語は「連体形」+終助辞 ka であり(sakei nomoka? 酒を飲む?), WH 疑問文の述語は「連体形」のみである(anjo nomo? なにを飲む?)。しかし、WH 疑問文を ka 引用句にいれるばあい、ka のまえは~o 連体形ではなく~u 終止形で、anjo cukuruka kaNge:te (なにを作るか考えて)のようになる。新たな傾向としてその混用がみられる。

43 sake:wa {dogan-jatte/ dogancite} tsukuroka ome:wa citta:ru:. (酒はどうやっつくるかおまえは知っているだろう?) 三根 NS (cukuruka)

43 saki:wa adanjite tsukuroka omiwa obi:taro: (酒はどうやっつくるかおまえは知っているだろう?) 檜立 KT (cukuruka)

6. 形容詞語彙の動詞代用

八丈方言で「知っている／知らない」は動詞ではなく、形容詞語彙の sjo(q)kja (知っている) / sjoku na(q)kja (知らない) が使用される。この語彙は古代語の形容詞シロシ(白し、著し)に由来し、方言形の連体形*sjiroke > sjoke に終助辞 wa が融合してできているが、ここに共通語の「知っている」がシツテアルのかたちで入り込んできたものである(この方言のイルは「居る」ではなく「座る」の意味で、人にもものにもアルを使用する)。ただし、3例目以下では形容詞語彙も併用されている。なお、この調査ではこの語形は坂下地区にのみあらわれている。

41 ome:wa kono jono name:o citta:roka:. (おまえはこの魚の名まえを知っているか。) 三根 NS (sjokeka)

43 sake:wa {dogan-jatte/ dogancite} tsukuroka ome:wa citta:ru:. (酒はどうやっつくるかおまえは知っているだろう?) 三根 NS (sjokeka)

43 sakewa adanjatte tsukurudaro:no: , ome:wa {fitto:dzaroka / foko:dzaroka:} (酒はどうやっつくるかおまえは知っているだろう?) 三根 YK (sjokuozjaroka)

35 hakono nakaniwa mandzu:ga ikutsu aroka{ittaroka / jokeka} (箱の中にまんじゅうがいくつあるとおもうか。) 大賀郷 KT (sjokeka)

41 omaewa kono sakanano namaeo {jokeka / jittaroka} (おまえはこの魚の名まえを知っているか。) 大賀郷 KT (*sjokeka*)

43 sakewa dogan {jite / jatte} tsukuruka omaewa {jittaroka / jokeka} (酒はどうやってつくるかおまえは知っているだろう?) 大賀郷 KT (*sjokeka*)

7. 弱変化動詞過去形の強変化動詞化?

この現象は1でみたのとは逆に、弱変化動詞の過去形が～タラではなく、強変化的な～ララとなっているもので、これまで確認されていなかったものである。こうした変化はこの方言の大きな変化の流れに逆行しているようにみえる(再確認が必要か)。ただし、同一地区の同一話者にのみあらわれているので、孤立的な現象とみてよいかもしれない。あるいは、「調査」という状況のなかで生じた過剰な「方言回帰」という可能性もないとはいえないか。

なお、強変化動詞の～ララは東北方言のシタッタ形(=タリタリ形)に対応するアリアリ形で、現在から切りはなされた(アオリスト的な)過去をあらわす。八丈方言ほどではないが、東北方言で存在動詞イルのタリ形=過去形(イダ)がアクチュアルな現在テンスをあらわし、シタ形(=タリ形)、シタッタ形というふたつの過去形をもつことも、タリ形がまだ過去テンス形式になりきっていないことのあらわれである。

58 wage:nowa takede kago: kose:rara (夫は竹でかごをつくった。) 大賀郷 KT (*kose:tara*)

60 saburo:wa djiro:ni bo:de {bunnagurare tara / bunnagurare rera} (三郎は次郎に棒でなぐられた。) 大賀郷 KT (*buNnagurare tara*)

61 djiro:wa dji:tjanni {so:gare tara / so:gare rera} (次郎はじいさんにしかられた。) 大賀郷 KT (*so:gare tara*)

おわりに

以上、八丈方言にあらわれたいくつかの新たな現象をとりあげた。全体をみると坂上の末吉地区の例がきわめて少なかった、つまり、末吉地区には新たな現象が少なかったということになるのだが、その理由として、今回の話者の数がほかの地区よりも少なく、調査班も末吉以外が4班なのに対して2班で、結果として資料の数自体が少なかったことがあげられる。それに加えて、つぎのようなことも考えられるだろう。

坂上と坂下を結ぶ大坂トンネルは明治期に開通したもので、それ以前は三根から三原山の周囲を大坂トンネル方向とは逆の時計回りで末吉に行くか、三原山のなかをとおって末吉に行くかが主たるルートだった。したがって、その当時は檜立がもっとも奥まった地域であり、それゆえに民話「人捨て穴」の舞台とされたのも檜立と大賀郷のあいだの伊郷名(大坂トンネルの檜立寄り)というところだった。このように、伝統方言では大まかにいって坂下～末吉～中之郷・檜立のように連続していたものが、大坂トンネルの開通後は坂上地区の入り口が檜立になったため、それ以降、坂下から発信される方言の新たな変化も、乗り合いバスのルートと同様に檜立・中之郷を経由して末吉へ、という流れに変わってしまったのである。

今回のデータはけっしてじゅうぶんな量とはいえないが、いずれにしても、島の中心部である坂下地区に新たな語形が多くみられ、坂下からもっとも離れた末吉にそれがわずかしきみられなかった点は、周圏分布的な解釈を許容するだろう。坂上地区のなかでも、伝統方言としてはより

古い状態を保っていた檜立・中之郷のうち、大賀郷に近い檜立に新たな語形が比較的多くみられた点も、二次的な周圏分布として、大坂トンネル開通後の坂下からの直接の影響とみることができそうである。

しかし、共通語の影響を受けた新たな語形はまだ古いタイプの語形と共存していて、語形交替の途上にある。したがって、方言の継承・再活性化のためには、方言使用者に語形の新旧を認識して自覚的に使用してもらうことで、より古いタイプの語形の延命(～継承)をはかることはまだじゅうぶんに可能であると考えられる。